

前号に引き続き、5月13日の行動目的の一つ、老虎会のKさんから依頼された満州国時代の建物の現状確認についてお話ししたい。確認すべき4つの建物をここに再記すると——①星ヶ浦ヤマトホテル ②満鉄総裁邸 ③双葉学院 ④浪速寿司——である。これらの建物は頂いた資料からすると、いずれも大連市内の中心部周辺にある。

まず①の星ヶ浦ヤマトホテルの探索からスタートした。星ヶ浦は、現在は市の中心部からやや西寄りの星海公園あたりの海岸線沿いの地名だ。「星ヶ浦」と聞くと、当時大連で生活していた人からすると甘く切ない気持ちになると思われる。戦前は大連一の海水浴場で風光明媚な場所であった。親子連れで星ヶ浦に海水浴に来られた方は多いであろう。資料の写真からすると海岸を望む場所に建っていてそのあたりに車を停めたが、写真の建物は見つからず低層のマンションがいくつか建っている。友人に近くにいた年配の人に写真を見せて訊いてもらったが、この建物はすでにないと言う返答であった。星ヶ浦ヤマトホテ

ルは設計者は不明であるが豪華客船に似た外観で、洒落たデザインであるが、二度と見られないとは誠に残念である。ここもひとつの歴史がなくなったのだ。考えてみれば今から80年以上前に建てられたのであるから老朽化し取り壊されたのは仕方がないことであるが。それに引き換え、中山広場に面している大連ヤマトホテル(1914年竣工)は大連賓館というホテルに姿を変え、今に雄姿を残していて褒めてあげたい気持である。私も一度このホテルに泊まったことがあるが、流石に年月を感じさせる。

次に②の満鉄総裁邸を探すことにした。場所は「市内沙河口区黒石礁」とあり、星ヶ浦ヤマトホテルからすぐ近くである。頂いた資料では、

「中村與資平記念館」となっている。前号に書いたように、第14代総裁を務めたあの松岡洋右(1880年～1946年)邸であり、彼は1935年8月から1939年3月の約3年半総裁を務めたが、そのあとくらいに中村與資平が入居したのかもしれない。満鉄初代総裁の後藤新平邸は旧大連市役所のそばであるから、総裁邸も何か所かあったのであ



元満鉄総裁邸と筆者

ろう。

ところで「中村與資平」は次のような人物である。彼は、1880年に浜松市で生まれた。名建築家の名を欲しいままにし、朝鮮、旧満州及び静岡県などで多くの銀行や公共建築物を設計した。作品は、朝鮮銀行本店、朝鮮銀行大連支店、静岡



在りし日の「星ヶ浦ヤマトホテル」(ウィキペディアより)



昔の星が浦、現在の名は星海公園 (M氏提供)

銀行本店、静岡県庁本館、静岡市役所など枚挙に暇がない。松岡洋右と同年生まれであるが66歳で病没した松岡と違って中村は83歳の生涯であった。

さて総裁邸であるが、あったのである。裏道を何度か回っているうちに写真と同じ建物が目の前に現れたのだ。嬉しかったのは言うまでもない。これでKさんに胸を張って報告ができる。あれこれ書くより写真を見ていただく。流石に立派なレンガ造りの邸宅である。ただがっかりしたのは、記念館として残っているのではなく、中国人の住居となっていたことである。

ここを後にして③の双葉学院を目指した。頂いた資料には、「双葉学院 日本在住のアメリカ人建築家ヴォーリズ的设计。1939年竣工。青泥街11号」と書いてある。双葉学院は、ミッションスクールである。ヴォーリズは大連に住んだ記録はないが、何度か出張で行っていたらしい。友人に聞くと、この住所は大連駅の近くだと言う。行って見たが大連駅の周辺は再開発されているのかそれらしき建物や街並みも残っていない。80年近く前の建物ということもあるが、再開発のため取り壊されたのかもしれない。当時の写真を見ると三角屋根の教会風の建物である。

ここでヴォーリズがどのような人物か紹介したい。彼も1880年に、アメリカ・カンザス州

で生まれた。1905年キリスト教伝道の目的で来日し、滋賀県・近江の商業学校の英語の教師となった。その後建築設計の仕事をした。日本で多くの西洋建築を手がけた建築家であるが、もう一つ実業家の顔を持っていた。彼は3人の友人と合名会社を立ち上げた。後に近江兄弟社となり、メンソレータムを広く日本に普及させたのだ。1919年、子爵一柳末徳ひとつやなぎすえのりの三女・満喜子と結婚。1941年戦時下で国籍を変え、日本人一柳米来留ひとつやなぎめ れるとなる。終戦後は、二つの母国の懸け橋となり積極的な働きをした。83歳の生涯を終えるまで近江八幡市に住んだ。彼の設計した建物は前出の中村與資平に引けを取らない。

一つだけ作品を挙げたい。それは関西学院大学・上ヶ原キャンパスである。彼は、親交のあった同大学の4代目院長(米国人)から頼まれ、キリスト教主義をその基調に置く関西学院大学に相応しい景観を造り上げた。キャンパスの中央に芝生広場がある。芝生広場の中心を軸とし、背後の甲山の頂上を起点とし、時計台から中央広場を貫きそして正門に一直線と伸びる様は、見た様子は異なるが法隆寺の伽藍を彷彿とさせそれはそれは美しい。見てきたようなことを書いたが、実は私の家の近くに同校を卒業された方が住まわれている。その方から「母校通信」という冊子をお借りしたが、その中に書かれていたものである。掲載の写真を見ると、一つ一つの校舎は勿論美しいが、全体の統一感が日本人には



大連双葉学園全景(日本組合基督教会便覧、昭和15年より)

ない感性を感じさせる。

依頼された建物の最後は、④の浪速寿司である。浪速寿司というくらいであるから当時の浪速町にあった。浪速町は、大連の街をご存知の方はお分かりと思うが、大連駅と友好広場の中間あたりにあった町である。早速そちらに移動して3階建ての建物を探したが街並みは一変しており残念ながら見つけれなかった。浪速寿司の建物(1935年竣工)を設計した建築家「横井謙介」について簡単に紹介をしたい。

彼は、1870年生まれで大陸に渡った後満鉄に就職した。いくつかの建物を設計したが、満鉄を退社後大連に建築事務所を開設した。彼の代表作は、遼寧省・瀋陽にある「奉天ヤマトホテル」である。1929年に竣工している。72歳で没するまで旧満州の多くの建物の設計に携わり、大連などの近代化に貢献した。

4つの依頼された建物のうち、現存が確認できたのは一つだけであったが私は満足している。Kさんの依頼により紹介した建築家の一生を知ることが出来、大連の街の発展に如何に寄与してきたのかが分かったからだ。満鉄総裁の街づくりの役割は極めて大きいし、業績は後世に残る。しかし実際に街の建物を設計し、街並みを造り上げていったのは彼ら建築家達であることを忘れてはならない。常日頃さほど日の当たらない仕事であるが、彼らを大いに評価したい。かくして5月13日は終わり、案内してくれた友人たちと食事をしたが、彼らも私に引きずられるようにして大連の歴史に興味を覚えてくれたよう

で、これはうれしいことであった。

急にこのシリーズで一つ書き忘れたことを思い出した。それは(その1)で友人の娘さんが8月初旬に出産予定で、その結果を知らせたいと書いたことである。実は7月31日、予定日より1週間早く無事に5.7斤(2850g、1斤=500g)の女の子が生まれたと微信で報告があった。出産は「剖腹産」とある。帝王切開のことだ。粉ミルクを3缶も必死で運んだのに、「母乳很多、不要奶粉」と素っ気ない。私をねぎらう言葉は無い。3缶は一体どうするのであろう。3か月経ったころ、女の子の写真を送ってきたが、丸々と太って美人であった。



5月14日は、友人に絵葉書を書いたり、街中をぶらぶらしながら孫へのお土産を買ったりした。日本は5月の第2日曜日は「母の日」であるが、中国も同じである。商店街にはカーネーションを売っている女の子をあちこちに見かけた。楽しい日々の過ぎ去ることの早いこと！中国語で「時間過得真快！」というが明日の15日は帰国の日である。15日は朝8時20分発の便なので6時にホテル前から地下鉄に乗り空港に向かった。(おわり)



5月10日から15日までの6日間、5回に分けての旅行記は本稿で終わります。

次号からは、今年(2017年)10月19日から一週間訪れた四川省の旅行記を掲載する予定です。